

木村定三氏旧蔵の木造不動明王立像について

京都国立博物館 浅 洩 育

はじめに

愛知県美術館に寄贈された木村定三氏旧蔵の一群の美術コレクション中には、東南アジアから中国、朝鮮、そしてわが国へといたる宗教彫刻が多数含まれている。そのなかでも白眉といえる仏像が、ここに紹介する三尺ばかりの不動明王立像である。同像は近年財団法人美術院の手によって修理が施され、かねてより、X線撮影等でその存在が知られていた像内納入品も、今回無事取り出されることとなった。それらは本体とは別途保存されることとなり、現在修理が行なわれている。

修理そのものに関しては修理を担当した財団法人美術院（編注：本書p.42～47）より、納入品については大原嘉豊氏（編注：本書p.27～32）より、それぞれ別稿で紹介されることになっている。したがって本小考においては、像自体の形状、構造（註1）や加飾技法などについて概観したのち、それから判断される像のおおよその製作年代や、製作にあたった仏師の系統についても可能な限り考察を加えたいと思う。また、木村氏以前に本像を所蔵していた旧蔵者についても、すこし興味深いことが判明したので記しておきたい。

一、像の形状、構造および加飾について

[形 状]

本像は像高九五・三センチをはかる（註2）不動明王の立像である（カラー図版p.1～4）。面部はほぼ正面を向く。頭頂に四弁花を中心とした八莎髻をあらわす。頭髪は巻髪とし、正面中央に花冠をあらわす。弁髪を左肩に垂らすが、結節をあらわさず毛筋等も刻まない。額には三条のしわを陰刻し、眉間を寄せる。眼は彫眼とし、左目をすがめ、目尻外側に二条の小じわを刻む。下唇で上唇を噛み、左右の口端に一本ずつ牙をあらわし、左は下出、右は上出する。耳朶はわずかにくぼむが貫通せず。頸部には三道ならぬ二道を刻む。上半身には左肩より条帛をかけ、左肩上には折り返しをあらわす。腹部にあらわされた条帛末端の垂下部は三角形をなす。左手は垂下して羈索（後補）、右手は腰脇で三鉢劍（後補）を執る。下半身には裳をまとい、上端には折り返しによるたるみをあらわす。その下に腰布をつけ、正面には結び目をあらわす。裸足で後補の岩座上に立つ。鉢、連珠、鉢から構成される臂釧、腕釧、足釧をつける（いずれも彫出）。右足首の内側に小さな紙片が貼り付けられ、そこには

「不動明王像／池田庄太郎氏」との墨書がある（挿図1）。現状では光背を亡失する。岩座は後補の框座の上に載せられるだけで、枘等で固定されてはいない。

以上形状を概観してきた。その結果気付かれるのは、以下のような特徴である。すなわち左目をすがめ、牙が上下出るのは不動十九觀に準ずるが、それ以外は、花冠、結節を有しない弁髪、三角形にあらわされた条帛垂下部、連珠を有する腕釧など、円珍請來様と称される不動のそれを比較的多く備えている像容だ、ということである（註3）。

なお、かねてよりX線撮影によって、像内に納入品があることが確認されていたが、今回の美術院による解体修理によって、納入品と像内の底にあった絵画断片が発見された（カラー図版p.11）。納入品は明暦四年六月の修理時に納入された文書一枚であった（カラー図版p.9）。これらは取り出して別保存されることとなった。

[構造]

本体はヒノキ材とみられる針葉樹による寄木造である。表面は白土地の上に彩色を施し、一部に截金を置く。眼は彫眼とする。

構造の詳細は、頭頂から耳後、さらに両足後方を通る線で前後二材を矧ぎ寄せ、頭体に関しては割首としたうえで、像内には内剤を施す。ここまでは通常の寄木造の像によく見られる構造である。ところが本像の場合興味

深いのは、割首のち頭部をやや右方に振って取り付けていることである。さらにこの仕様に合わせて、背面材においては背中の中央部分と首後ろに横方向に鋸を入れて切り離し、背中の中央から首にかけての材、後頭部の材、後頭部下方の首柄部の材それぞれを別材に取り替えていることが修理の結果判明したのである（註4）。

（挿図2、カラー図版p.6に同じ）は側面から撮影したX線写真だが、背面中央の鋸目がよく確認できる。これらは首の角度をかえて、像容に微調整を施すための仕様と考えられよ



（挿図1）



（挿図2）

う。あとで詳述するが、このような仕様は、たとえば初期慶派による可能性が指摘されている香川県・与田寺の不動明王立像などにもみられるもので（註5）、本像の仏師系統を考えるうえでも興味深い技法といえよう。また、特筆される本像の造像技法としては、両足をともに膝上で前面材から割り放つ、いわゆる割足とする点があげられよう。

そのほかの細部においては、両肩先に別材を寄せ、左腕は肩から手先まで一材より彫出し、右腕は肘上と手首でそれぞれ別材とする。下半身では、腰布の垂下部を別材とし、左足は足柄を含めた足先、第一指、第五指にそれぞれ別材を寄せ、右足は指先のみ別材を矧ぎつける。そのほか左裾をはじめ各所に小材を矧ぐ。

[加 飾]

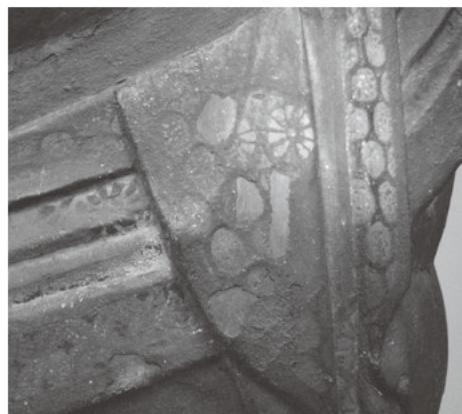
本像の加飾技法としては、着衣部分に彩色による文様と、截金による文様が混在している点があげられよう。以下、上から順に主要な文様をみていく。

上半身にまとう条帛では、表には地に丹の具を施したうえに菊花を描き、裏（三角形の垂下部）は緑青かとみられる顔料で亀甲文を描いて区画をなし、その内部には朱地の上に七星よりなる点花文？をあらわす（挿図3）。

腰布は表を緑青地とし、その上に四菱入り二重立涌を截金であらわす。縁には、ほぼ正方形に近い菱形の小片を連珠様につなぎ、その上下を二重線がはさむ文様を、おなじく截金であらわす。

裳の折り返し部分は、緑青地の上に格子と斜格子をかさねて、その交点に小さな菱を配する文様を截金であらわして地文様とする。そこに截金で大きな円を配し、その内部に彩色でパルメット文を描く。折り返し部分の縁は丹の具で一条の紐帶を描き、その下方には緑青地に截金でモール状の垂飾を表現する。

裳の本体は、表が朱地に七宝つなぎ文を截金であらわしたもの地文様とし、そこに裳の折り返し部分と同様に截金による円文（ただしこ



(挿図3)



(挿図4)

ちらは二重円とする)を配して、その内部には細長い二等辺三角形を円形に配した菊花を三つほどあらわす(挿図4、カラー図版p.8に同じ)。縁の部分には、現状白くみえる顔料で、連点文と大振りな花文を描く。裳正面の合わせ目は翻って裏面がのぞくが、そこには縹緲彩で大振りな雲文が描かれている(挿図5、カラー図版p.8に同じ)。

以上詳しく加飾をみてきたが、本像の特徴として截金もそれなりに多用するが、重要な部分においては彩色で文様をあらわすという点があげられよう。



(挿図5)

二、前所蔵者について

前章で確認したように本像の右足首後方左側面には、何らかの展覧会などに出品された際に付されたと思しき紙札が貼付されている。そこには木村定三氏以前の本像所蔵者とみられる「池田庄太郎」なる人物の名前が記されている。

池田庄太郎氏といえば戦前から戦中・戦後にかけて、古美術品のコレクターとしてよく知られていた人物である。当時恩賜京都博物館と称していた現京都国立博物館においても、昭和十七年四月に「池田庄太郎氏蔵 古鏡特別陳列」という展示が行なわれている(註6)。同展に際して発行された簡易な目録によると、氏は大阪市在住ということであった。これを手がかりに今回同氏に関して調べたところ、以下のようなことが判明したので、手控えとしてここに記しておく。

同氏は当時、大阪市東淀川区(現北区)長柄東において池田庄太郎商店という店を経営しており、同商店はおもに缶詰や清涼飲料水などを取り扱っていたらしい。それらは軍需品でもあったらしく、戦地の慰問袋の内容品としても用いられていたことが、当時の広告からわかる。時節を反映して「無敵シロップ」なる商品なども取り扱っていたようだ。

また、同志社の卒業生としても目立つ存在であったようで、本人がのちに『同志社時報』に寄せた随想には、相撲部で活躍した旨記されている(註7)。同書には大正五年(一九一六)に同志社普通学校を卒業したとあり、同校は旧制高校にあたるということなので、十九から二十歳で卒業したと考えれば、その生年は十九世紀末頃になるだろう(註8)。

同志社では新島襄の没後五十年を契機に昭和十五年頃より新島襄遺品庫の建設計画が持ち上がった。その頃に氏は四十代はじめから半ばであったかと考えられるが、大学が遺品庫の建設予算として計上していた三千円では頑丈なものはできないとして、一万円の寄付を申し出たらしい(註9)。

このエピソードからも理解されるように、商店経営からの収入は多大なるものがあったか

と想像される。その豊かな財力を背景に、古美術品の収集も積極的に行なったようである。氏の収集品は、先に記した古鏡にとどまらず、古写経、仏像、仏画、さらには仏具をはじめとする工芸品と多岐におよんでいる。それらの中から作品を厳選しておさめた『池田大仙堂古美術集芳』と題する大型の豪華な美術書も、昭和十六年におそらくは自費で出版している（註10）。同書には、現在比叡山延暦寺に安置されている十世紀の作の薬師如来坐像などもおさめられており、同氏の古美術をみる眼の確かさを物語っている。ここに取り上げる不動明王立像も同書におさめられており、かつては同氏の所蔵品であったことが確かめられる。

ちなみに『集芳』には源豊宗氏をはじめ、当時の錚々たる研究者が解説文を寄せているが、本作品の解説は当時大阪美術館主事であった望月信成氏が担当されている。望月氏の本作に対する評価を抜き書きすると「表面の彩色中に精巧なる截金彩色があり、五彩鮮かな色調と金色燐然たる光沢と相俟って本像の美觀を一層増大し、製作当初の美しさが眼當り見得る気がする。本像の製作に対し決定し得る確証はないが、恐らく藤原時代末葉頃のものと考えられ、現在不動明王像中稀に見る佳作と思われる」と、その評価は高い。

三、製作年代および仏師系統について

さて、前章で見たように、望月信成氏によって藤原時代末葉の作として高く評価された本像だが、研究の進んだ現在ではその製作年代はどのように判断されるべきであろうか。氏のいわれる末葉がどれくらいの幅を持つのかは明確ではないが、おそらくは十二世紀後半、それも終わりに近い頃を指しているのではないかと想像される。和様の進んだ穏やかな作風は定朝様の延長線上にあり確かに藤原時代のものだが、氏の指摘よりもう少しあげて、十二世紀前半とするのがよいのではないかと筆者には思われる。というのも、十二世紀も後半に入ると、定朝様もより纖細さを増していくからで、本像のような比較的量感のある像容は、十二世紀初頭頃に活躍した円勢、院助、頼助といった、定朝よりみて第三世代にあたる仏師、ないしはそれに続く世代の仏師の特徴ではないかと思われるからである（註11）。

その三派の仏師系統のなかで、本像がどの系統の仏師によるものかさらに考察をすると、まず本像のおおらかな作風は、円勢ら円派と称される系統の仏師のやや装飾的な作風とは異なるように感じられる。とはいっても、院助および頼助の確実な作例が知られていない現状では（註12）、院派あるいは奈良仏師そのいずれの系統に属するものかとも断言はできない。しかしながら、筆者としては以下の特徴から、奈良仏師の系統に属する仏師によって造像された可能性があるのではないかと考えている。

そう思わせる根拠として、以下の二点を指摘できる。すなわち、ひとつが割首をしたのに首の向きを微調整するという技法的特徴である。すでに述べたように、不動明王の首の向く方向を調整するということは、香川県・与田寺の不動にもみられる技法である。同像はその像容から、初期慶派によるものである可能性が指摘されており、近年行なわれた解体修理の結果、矧目より「康慶」と読める墨書が発見されたことでも注目された（註13）。また同像以外にも、鎌倉時代の慶派の作例においては、腰の部分で上下を一旦切り離して、上半身

の向きを変更するなどの改変が造像当初に行われていることも、いくつかの像で確認されている（註14）。したがって、本不動明王にみられる首の角度改変は、そのような鎌倉時代の慶派が多用した技法の先駆けとなるものかとも考えられるのである。

さらに本像が、奈良仏師によって製作された可能性を示唆していると思われる点が、表面に施された加飾である。すでに本像の加飾の特徴として、截金と彩色文様が併用され、重要な文様は彩色であらわされる傾向にあることを指摘した。同様の傾向は伊東史朗氏の指摘にもあるように、たとえば淨瑠璃寺に所蔵される四天王立像の加飾にもみられる。淨瑠璃寺像の加飾に関して伊東氏は、「十二世紀に都を中心に行われた幾何学文を多用した平面的で繊細な文様とは対照的に、旺盛に躍動感と立体感を伴って、多様で大振りなものである」と述べられている（註15）。本不動明王の場合、淨瑠璃寺像ほどには彩色文様が多用されているわけではないが、裳の合わせ目の裏面部分に描かれた雲文など、主要な文様は彩色であらわされており、淨瑠璃寺像と同じ傾向を示すものといえるのではないだろうか。

淨瑠璃寺像に関しては仏師系統を断定する資料はないが、淨瑠璃寺の存在する南山城という地理的環境や、同寺が南都興福寺との関係が深かったことを勘案すれば、奈良仏師による可能性が高いのではないかと私考される。したがって本不動も加飾技法の特徴から考えて、京都の工房によるものではなく、南都の工房、すなわち奈良仏師による造像の可能性があるのではないだろうか。それが覚助から頼助へと続く、定朝以来の正系仏師へと直結する仏師によるものかどうかは断言できないが、本像の巧みな造形をみる限り、正系に近い仏師であった可能性も想定できるように思われる。

おわりに

以上、本像の像容より判断しうる製作年代と仏師系統に関して考察を行なった。その結果、本像が十二世紀の前半に、南都で活躍した奈良仏師ないしはその周辺の仏師によって製作された可能性を指摘した。当該期の奈良仏師に関しては頼助の確実な遺例が現在知られていないため、不明な点が多い。しかしながら、本像がこの期の奈良仏師の作であるという前提のもと、今後はさらに類例を集めて考察を進めていきたいと考えている。

なお、本像が池田庄太郎氏から木村定三氏へと、どのような経緯をたどって移ったのかという点に関して、残念ながら現在のところ不明である。その詳細や、あるいは池田氏旧蔵で、『池田大仙堂古美術集芳』に所収の古美術品の消息などについて、もし情報がおありであれば、ぜひともご教示たまわりたい。

最後に、本像を調査する機会を与えていただいた愛知県美術館の皆様に感謝しつつ筆を擱くこととする。

[註]

- 1 構造の詳細について、現状で目視による確認が困難な部分に関しては財団法人美術院による「修理解説書」を参照した。
- 2 美術院の計測による法量の詳細は以下のとおりである（単位はセンチメートル）。

総 高	一〇四・三（頭頂～岩座地付）	髪際高	八九・七
像 高	九五・三	髪際顎	一一・〇
頭頂顎	一七・一	面 幅	一〇・四
耳 張	一四・六	腹 奥	一七・二
面 奥	一四・一	裾 張	二六・八
肘 張	三九・三		
足先開	二四・〇（外） 一四・二（内）		
- 3 同様の特徴を有する不動明王の立像は、高野山靈宝館に現在安置される十二世紀初頭の半丈六像（高野山千手院觀音堂旧安置）をはじめとして、平安後期から鎌倉時代に限ってもいくつかの例があり、本像特有のものではない。これが円珍請来様の発展形式なのか、それとも何らかの経典や図像に基づくものかについて今のところ私案はないが、継続して調べたいと考えている。
- 4 財団法人美術院の修理解説書による。
- 5 奥健夫・淺湫毅「香川・与田寺不動明王及童子像の修理および三次元計測」『科学研究費補助金基盤研究（A）中間報告会資料集 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察』（京都国立博物館・二〇一〇年）
三好賢子・木下成通・奥健夫「与田寺木造不動明王及童子像修理報告」『ミュージアム調査研究報告』第二号（香川県立ミュージアム・二〇一〇年）
- 6 恩賜京都博物館『池田庄太郎氏蔵 古鏡特別陳列目録』。展覧会の会期は昭和十七年四月十一日より二十六日まで、重要美術品に認定された鏡を複数含む全七十面が展示された。
- 7 池田庄太郎「四つの段階」『同志社時報』第三〇号（同志社大学・一九六八年）
- 8 池田庄太郎氏に関する書籍・資料等を筆者が可能な限りあたったが、正確な生没年を記すものはこれまでのところ発見できなかった。同氏に関する情報をお持ちの方はぜひともご教示たまわりたい。
- 9 『同志社新報』第四六号（同志社大学・一九四〇年）
- 10 秩におさめられた和綴じの豪華本で、上下二冊の写真集と別冊の解説からなっている。
- 11 定朝第三世代にあたる仏師については、拙論「定朝第三世代の作風に関する一試論 一京都即成院觀音菩薩跪坐像を中心に一」『鳳翔学叢』第五輯（平等院・二〇〇九年）をご参照いただきたい。
- 12 ただし、京都即成院の二十五菩薩像のうち当初像十軀が院助作である可能性を武笠朗氏が指摘されている。また、筆者も前掲論文（註11）において、同像が院助周辺の作である可能性を論じている。また、伊東史朗氏が聖護院の不動明王立像が院助作である可能性を指摘する。
武笠朗「二十五菩薩坐像（解説）」『日本美術全集6 平等院と定朝』（講談社・一九九四年）
伊東史朗『院政期の仏像』（京都国立博物館・一九九二年）
- 13 前掲書（註5）
- 14 管見のかぎりでは、建仁寺の塔頭靈源院に所蔵される中巖円月坐像の像内から発見された毘沙門天立像（鎌倉時代前期・作者不明）、三十三間堂の二十八部衆立像のうちのいくつか（鎌倉時代中期・湛慶作）などにみられる。
- 15 伊東史朗『淨瑠璃寺の四天王像』（京都国立博物館・一九九〇年）

[付記]

池田庄太郎氏関連の資料収集にあたっては、同志社大学・井上一稔氏、同大学院生・森井友之氏のお手を煩わせた。また、本像の調査に際しては、大阪大谷大学・田中健一氏、愛知県美術館・深山孝彰氏、平井啓修氏、長屋菜津子氏の協力を得た。文末ではあるが記して感謝の意を表したい。
なお、本稿は筆者が研究代表者として平成二四年度より受けた科学研究費補助金基盤研究（B）「多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究—図像的典拠と分担製作の視点から—」による成果の一部である。



不動明王立像（愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションJS2002-006）正面
撮影日：2012（平成24）年11月20日（修理後）



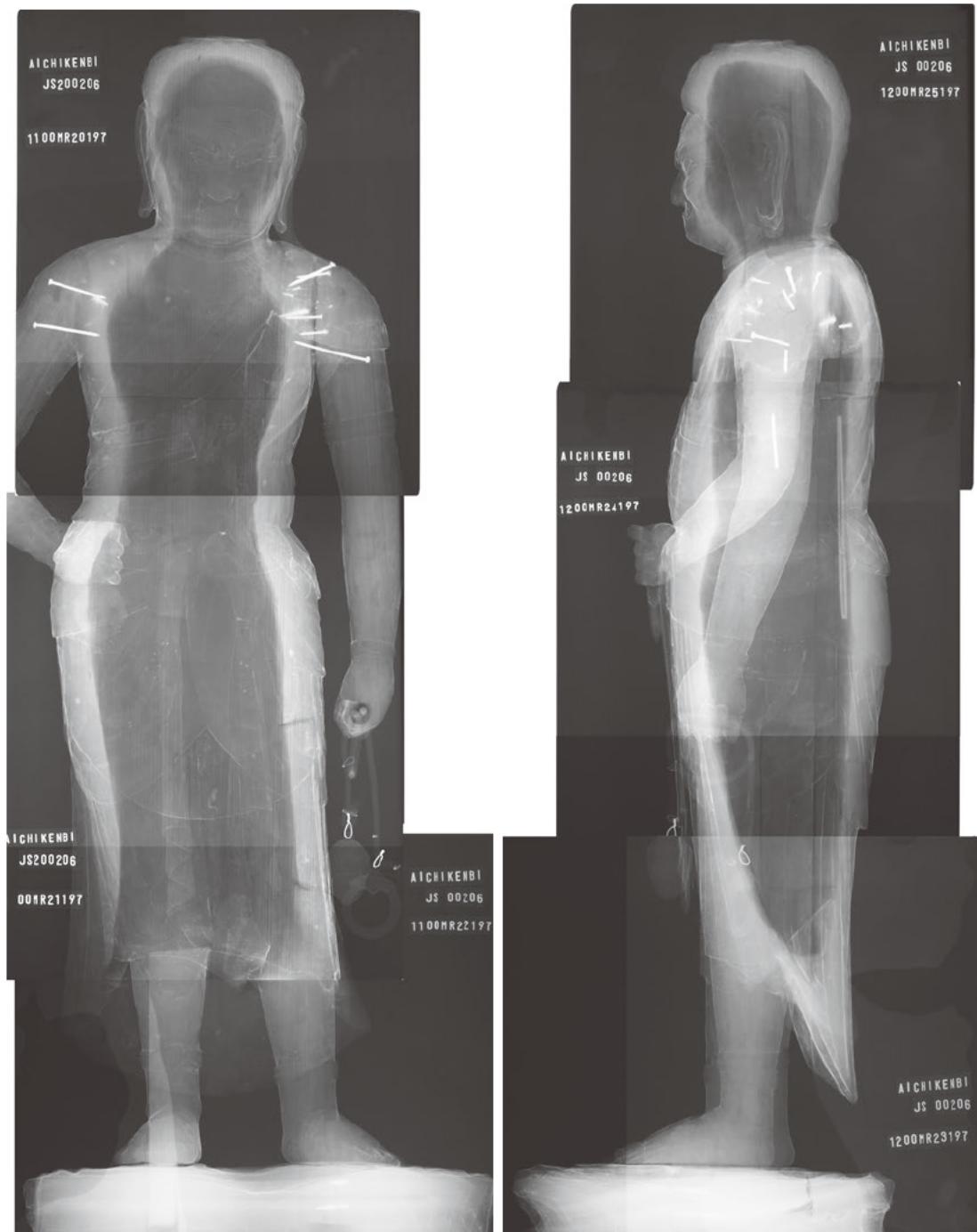
不動明王立像（愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションJS2002-006）側面
撮影日：2012（平成24）年11月20日（修理後）



不動明王立像（愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションJS2002-006）背面
撮影日：2012（平成24）年11月20日（修理後）



不動明王立像（愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションJS2002-006）斜
撮影日：2012（平成24）年11月20日（修理後）

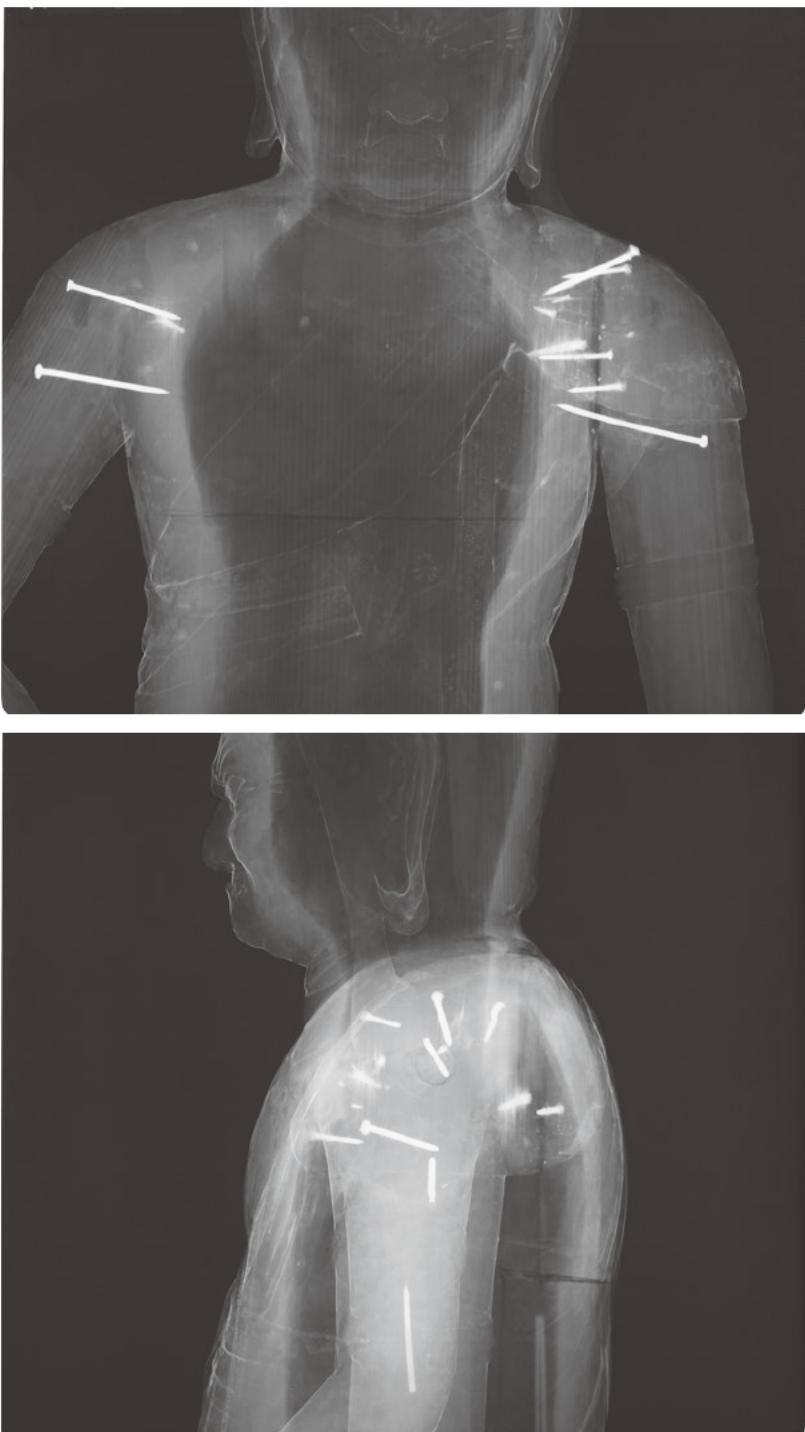


不動明王立像X線透過撮影合成画像

撮影日 2003（平成15）年3月27日（受贈直後）

撮影 財団法人 元興寺文化財研究所

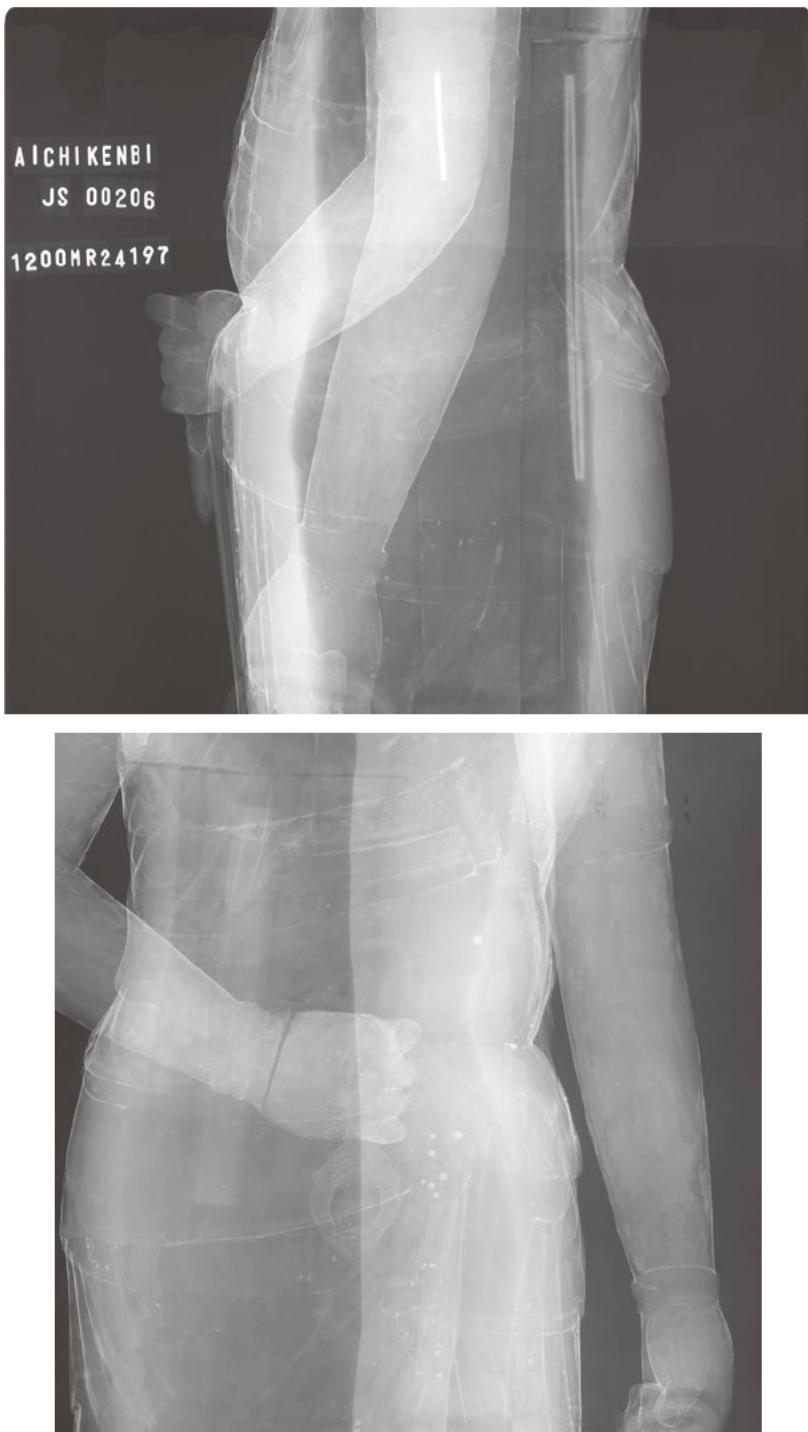
画像合成 田村明子



不動明王立像X線透過撮影画像「背面の鋸目」

撮影日 2003（平成15）年3月27日（受贈直後）

撮影 財団法人 元興寺文化財研究所



不動明王立像X線透過撮影画像 「胎内納入物」

撮影日 2003年(平成15)年3月27日(受贈直後)

撮影 財団法人 元興寺文化財研究所



挿図4
(p.22参照)



挿図5
(p.23参照)

不動明王立像表面加飾細部